


# デイサービスを利用している高齢者と その家族が感じる利用前後での変化

0708

## 研究背景・目的

- 日本の総人口に占める高齢者人口の割合の推移をみると、1950年以降一貫して上昇し、2019年には28.4%となった(総務省, 2019)。
  - 身体機能の低下から、高齢になるほど要介護になりやすく、要介護(要支援)認定者数は年々増加している(厚生労働省, 2019)。
  - 老化による身体的要因、心理的要因、社会・環境要因によって閉じこもり高齢者が増加している。
  - 閉じこもりは、意欲や運動機能の低下、抑うつ、痴呆症状などと強く影響しており、様々なハイリスク状態を引き起こす可能性が考えられ、寝たきり状態の原因の一つと考えられる。
- 
- 機能訓練事業やデイサービスに参加することは、認知機能や抑うつの悪化予防に効果がある(河野ら, 2002)。
  - 高齢者の外出に結びつく機会やサービスを利用することで、社会的な生活が広がり活動性が高まり、閉じこもりを予防することが出来るのではないかと考えた。

目的: デイサービスを利用している高齢者に注目し、利用者とその家族が感じる利用前後での変化を明らかにし、デイサービス利用の効果について考察する。

# 研究方法

- 研究デザイン**: 質的記述的研究デザインを用いた事例研究
- 研究対象**: デイサービスを利用している90歳代女性と同居家族の2名
- データ収集期間**: 2020年9月～10月
- データ収集方法**: 質問項目を記載した調査用紙を送付し、自由記載で回答してもらう。回答内容を確認しながら、対象者に詳細な内容について聞き取り調査を実施した。
- 分析方法**: 研究目的である利用者とその家族が感じる効果と利用前後での変化に着目して、意味のまとまりで分析した。研究指導者のスーパーバイズを受けながら分析を行い、結果の妥当性の確保を図った。
- 倫理的配慮**: 対象者に協力を依頼する際に、研究の趣旨と方法、研究参加の任意性、途中辞退できることを文書で説明した。また、プライバシー保護として、データは厳重に管理し、個人が特定されないようにし、研究終了後はデータを破棄することを伝えた。

## ○質問内容:

① デイサービス利用者の基本属性	年齢・性別・既往歴・要介護度・通所開始日・デイサービスを利用するきっかけ
② 支援者の基本属性	年齢・職業
③ デイサービス利用以前について	生活リズム・家事の頻度・外出の有無・友人と会うことの有無・趣味
④ デイサービスについて	利用頻度・過ごし方・利用者数・人付き合い・利用して良かったこと・悪かったこと
⑤ 現在の家での過ごし方について	生活リズム・家事の頻度・外出の有無・友人と会うことの有無・趣味
⑥ 家族が感じるデイサービス利用前後での変化	

# 結果①

## 事例紹介

A氏:90歳台女性。二人の息子がおり、長男B氏と二人暮らし。既往歴は認知症と若干のコレストロール過多。膝関節の痛みがあり移動の際は杖を使用。要介護度2。  
B氏:60歳台男性。A氏と一緒に暮らす。福祉施設の相談員として働いている。

## デイサービスに通うきっかけ

A氏の日常生活における物忘れが増えてきた。B氏の就労日にはA氏が一人で留守番をしていたが、近隣の公園を徘徊をすることや、怪我をして救急車で搬送されるなどの行動が増えてきたため、地域包括支援センターに相談に行き、紹介してもらう。平成27年4月からデイサービスに通うことになる。

## デイサービスでの様子

週3~4日通っている。施設の職員と良好な関係を築けており、他の利用者とも利用年月が長くなってきたため特定の友達もでき、概ね良好な関係を築けている。

表1 A氏の利用するデイサービスのスケジュール

9:00~9:55	送迎バスへの乗車
10:00頃	デイホーム到着
10:15~	バイタルチェック（体温・血圧・脈拍等の確認） 午前中のプログラム（軽い体操・お話し・レクリエーション） 入浴サービス
12:00	昼食 食後休憩
13:50~	午後のプログラム（音楽活動・生活作業・創作活動・教養活動・レクリエーション・散歩・外出等） 入浴サービス ※
15:30	お茶の時間
16:00頃	送迎バス デイホーム出発
16:30~17:30頃	ご自宅到着

## 結果②

表2 A氏のデイサービス利用前後の過ごし方の比較

	デイサービス利用前	デイサービス利用後
起床時間	5時頃	5時前後
家での過ごし方	ラジオを聞いて過ごす(午前・午後)。 部屋の整理と称して衣類を散らかしていた時もある。 20～21時頃までテレビを見る。	午前にはベッドでラジオを聞いて過ごす。 午後は昼食後に好きな塗り絵をする。 17時頃になると1階に行きB氏が夕食の支度をしている間はテレビを見る。 夕食後は2階のB氏の部屋で好きな時代劇やドラマなどをみて過ごす。
就寝時間	20～21時頃	21～22時頃
家事	していない	していない
外出	意思のある外出はなし。 徘徊が何度か確認され始めた。	月・水・金・(土)はデイサービスへ通所している。 それ以外はコロナの影響で積極的な外出は控えている。
他者との付き合い	古くからの近隣の友人が訪ねて来てB氏を含めて飲食をすることはあった。	友人とはコロナ禍の影響で会っていない。 帰宅後1日の出来事等の親子会話が増えてきた。 友達も出来て積極的に通所するようになった。
趣味や楽しみ		塗り絵はほぼ毎日やっている。(デイサービスでもやっている) 時代劇(特に鬼平犯科帳はいちおし)や演歌のテレビを観る。 施設の行事に積極的に参加するようになった。 バスでの日帰り旅行等個人ではなかなか行けないところにも行けるようになり(動物園や水族館などへ昼食を伴う旅行)とても喜んでいる。

## 結果③

### ○家族が感じるデイサービスを利用して良かったこと

- ①帰宅後1日の出来事等の親子会話が増えてきた。
- ②友達も出来て積極的に通所するようになった。
- ③施設の行事に積極的に参加するようになった。
- ④バスでの日帰り旅行等(動物園や水族館などへ昼食を伴う旅行)個人ではなかなかいけないところにも行けるようになりとても喜んでいる。

### ○家族が感じるデイサービスを利用してよくなかったこと

B氏が感じるデイサービスを利用して悪いと思われる事実は見当たらない。しかしB氏は、A氏のデイサービス利用期間が長く、環境に慣れてきていることや、正義感が強い傾向もあり、周囲の利用者に対して独善的にならないか懸念している。

### ○デイサービス利用前後で感じる家族から見た変化

通所することで職員や他の利用者との会話が増え本人の気分の高揚や脳の活性化につながっているのではないかと感じている。日々色々な催し物を行ってもらえるので本人も楽しんでいる様子をうかがえる。通所する事に本人がものすごく積極的であることがうれしいと感じている。

## 考察① 社会参加の機会が増すことにより人とのつながりが増える

(デイサービス利用以前)

意思のある外出なし



高齢者の地域における人間的交流の不足が、生きがいや楽しみを感じられないことの要因となっていると考えられている(廣瀬ら,2009)。

**デイサービスを利用し社会参加の機会が増加**

→他者との関わりのなかで、社会的な役割を獲得し、家族間での会話が増えるなどの自発的に行動することが増えたと考えられる。また、社会参加が活発になったことで、主観的健康観を高めることに繋がっていたと推測される。

(現在)

**積極的に通所**



利用者の方々との交流を楽しみにしており、交友関係も確立。

## 考察②日常生活の中の活動量が増加する

(デイサービス利用以前)

受動的



テレビ

ラジオ

(現在)

活動的に



レクリエーション

日帰り旅行

**不要な安静が減少し、活動量が増加。**

→廃用症候群の予防になっていることが考えられる。また生活リズムが整い、日中の活動量増加により、良質な睡眠を得ることが出来ていることも考えられる。



## 考察③ 趣味や楽しみをあらたに獲得する

(デイサービス利用以前)

趣味や楽しみなことがほとんどなかった



(現在)

趣味や楽しみを見つけた



塗り絵は特別な技術を必要としないシンプルな活動であるが、塗り絵を行うことで脳全体を活性化させる可能性を示唆している(初田,2007)。

また、好きな時に気楽に取り組むことができ、塗り絵の完成時には、大きな達成感や満足感を得ることもできると考えられる。

→デイサービス利用による社会参加の増加や活動量が増えた事で、趣味や楽しみをあらたに獲得し、生きがいにも繋がると考えられる。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力頂きました2名の方々に深く感謝を申し上げます。また、丁寧にご指導をしてくださいました伊藤桂子教授に心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- 初田隆. (2007). 「ぬり絵」の研究. *美術教育学: 美術科教育学会誌*, 28, 321-333.
- 藺牟田洋美, 安村誠司, 藤田雅美, 新井宏朋, & 深尾彰. (1998). 地域高齢者における「閉じこもり」の有病率ならびに身体・心理・社会的特徴と移動能力の変化. *日本公衆衛生雑誌*, 45(9), 883-892.
- 廣瀬春次, 杉山沙耶花, 武内あや, & 馬場崎未絵. (2009). 独居高齢者の生きがいに関する研究. *山口県立大学学術情報*, 2, 26-31.
- 河野あゆみ, 金川克子, 伴真由美, 北浜陽子, & 松原悦子. (2002). 地域高齢者における介護予防をめざした機能訓練事業の評価の試み. *日本公衆衛生雑誌*, 49(9), 983-991.
- 厚生労働省 (2007), 生活機能分類の活用に向けて, <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/dl/s0327-5l.pdf>
- 厚生労働省 (2019), 平成30年度 介護保険事業状況報告 (年報), [https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/18/dl/h30\\_point.pdf](https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/18/dl/h30_point.pdf)
- 厚生労働省 (2019), 各介護サービスについて, <https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000608309.pdf>
- 中俣恵美. (2011). 国際生活機能分類 ICF における「生活機能」をめぐる課題. *総合福祉科学研究*, (2), 103-114.
- 総務省統計局 (2019), 統計データ 1. 高齢者の人口, <https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1211.html>
- 高間由美子, & 杉原利治. (2002). 高齢者の社会参加と生きがいに関する研究: 1. 高齢者の社会参加の意義. *東海女子短期大学紀要*, 28, 31-38.
- 石岩, 谷村厚子, 品川俊一郎, & 繁田雅弘. (2013). 在宅高齢者の主観的健康感に関連する要因の文献的研究. *日本保健科学学会誌*, 16(2), 82-89.
- 山田実. (2014). 高齢者のサルコペニアと転倒. *日本転倒予防学会誌*, 1(1), 5-9.